

フランスから見た#MeToo運動

——ラファエル・リオジエ『男性性の探究』をめぐって

増田一夫 編

ラファエル・リオジエ 大嶋えり子 隠岐さや香 増田一夫



EAA Forum 19



EAA Booklet - 28

East Asian Academy For New Liberal Arts
Joint research and education program
by The University of Tokyo and Peking University

フランスから見た#MeToo運動

——ラファエル・リオジエ『男性性の探究』をめぐって

増田一夫 編

ラファエル・リオジエ 大嶋えり子 隠岐さや香 増田一夫

EAA

Contents

序 増田一夫（東京大学名誉教授） iii

ラウンドテーブル

「フランスから見た #MeToo 運動

——ラファエル・リオジエ『男性性の探究』をめぐって」 1

ラファエル・リオジエ（エクス=アン=プロヴァンス政治学院教授）

大嶋えり子（金城学院大学情報学部講師）

隠岐さや香（名古屋大学経済学研究科教授）

〔司会〕増田一夫（東京大学名誉教授）

参加者プロフィール 47

序

増田一夫（東京大学名誉教授）

本書に収録したのは、2021年7月22日に、ラファエル・リオジエ氏を囲んでおこなわれたラウンドテーブル「フランスから見た #MeToo 運動——ラファエル・リオジエ『男性性の探究』をめぐって」です。

開催の時期は、わが国では新型コロナウイルスの第五波が始まりつつあり、フランスでは1日の新規感染者数が2.2万人近くにのぼった頃でもあったため、ラウンドテーブルは遠隔方式にて、日仏同時通訳の助けを借りて実施されました。発言の音声を起こし、理解をより容易にするために若干の補足と註を加えてあります。

フランスでは2013年に同性婚が合法化され、同性カップルによる家族形成を視野に入れた法律の整備が進むという大きな変化が起こっています。どのようにして社会が同性婚を受け入れ、制度化するようになったのか？多くの研究者は、女性の社会・政治への進出、誕生する子どもの60%以上が婚外子であるという結婚規範の相対化、多様なセクシュアリティの認知をあげます。そして、なによりもすべての前提となったのが、両性の平等という理念だと指摘します。

だからといって、欧米でも両性の平等が十全なかたちで実現されたわけではありませんでした。その点をいやでも思い出させたのが、2017年のいわゆるワインスタイン事件と、それをきっかけに広がった #MeToo 運動でした。フランスでは、#MeToo より過激な「#豚野郎を告発せよ」(#Balance TonPorc) というハッシュタグが立ち上げられたこともあり、運動に対して批判的な声が女性からも上がりました。有名なのが、女優カトリーヌ・ド

ヌーヴや美術評論家カトリーヌ・ミエなど100名の女性が名を連ねたル・モンド紙の記事です(2018年1月9日)。そこで彼女たちは、行き過ぎたピューリタニズムを戒め、「性的自由のために必要な、しつこく口説く自由」を擁護したのです。

リオジエ氏は、当初彼自身もその人々に近い視点を共有していたと明かしています。しかし、その視点は誤解に基づいており、#MeToo運動の真意は別のところにあったことを理解したというのです。そのうえで、男性からのいかなるアプローチにも女性の「同意」が不可欠であることを強調しながら、女性が告発する男性(mâle)の害悪(mal)の核心を探究しようとしています。

これ以上の解説は控え、具体的な議論や説明については、以下のラウンドテーブルに譲ります。今日、「差別」が批判され、「共生」がいたるところで掲げられています。では、人類のなかで最も古く、最も執拗な差別の根源は何か？ それをいかにしてなくせるのか？ 絶えずその問いが再帰する以下の議論をたどることが、私たちの社会を振り返る一助になればよいと願っています。

ラウンドテーブルは、日本学術振興会、科学研究費補助金・基盤研究(B)20H04419「結婚の歴史再考——フランスの事例から見る(ポスト)結婚、生殖、親子、家族」が主催し、東アジア藝文書院(EAA)が共催するという形でおこなわれました。EAAのご支援にお礼を申し上げます。また、イベントの記録がEAAブックレットに収められることになりました。この点についても、深く感謝いたします。

増田一夫

ラウンドテーブル

フランスから見た #MeToo 運動

ラファエル・リオジエ『男性性の探究』をめぐって

はじめに

増田一夫：今晚は。本日は「フランスから見た #MeToo 運動——ラファエル・リオジエ『男性性の探究』をめぐって」のために大勢お集まりいただき、誠にありがとうございます。

司会を務める増田一夫です。私の専門はフランスの哲学、そしてフランス地域文化研究。2020年3月まで東京大学大学院総合文化研究科（駒場キャンパス）で教員をしていました。このたび、当時の同僚であり、現在でも研究仲間である伊達聖伸さんの発案で、ラファエル・リオジエさんが上梓された『男性性の探究』をめぐって2回のラウンドテーブルをおこなうことになりました。初回が本日の「フランスから見た #MeToo 運動」です。第2回は来週7月26日（月）の「女性蔑視はどう作られるのか」です¹。いずれも、東京大学・東アジア藝文書院の協力をいただいて実現することになりました。企画の一端を担う者として東アジア藝文書院には深くお礼を申し上げます。

私はリオジエさんとはこれまでお話ししたことはありませんでしたが、お名前や著作は存じ上げていました。リオジエさんは、エクス=アン=プロヴァ

¹ シリーズ第2回の「女性蔑視はどう作られるのか」は、『群像』76（10）、2021年10月号、176-192頁に抄録されている。また、連続討論会「ラファエル・リオジエ『男性性の探究』をめぐって」の報告は、東京大学東アジア藝文書院サイトの以下のページで読むことができる。<https://www.eaa.c.u-tokyo.ac.jp/blog/20210722-26/>

ンス政治学院の教授であり、パリの国際哲学コレージュでも教えていらっしゃいます。ご専門分野は社会学と哲学ですが、理論的な研究にとどまることなく、目の前で起こっている現象について、鋭い切り口で考察を展開しています。特に、フランスにおける宗教やマイノリティの問題、アイデンティティの問題、フランス共和制を支える諸価値をめぐる問題について、積極的な発言をされています。

遅くとも1980年代から、フランスでは、社会全体が「イスラーム化」するのではないかという強迫観念が広がりました。リオジエさんは、2012年に刊行された『イスラーム化の神話』²においてまさにその点を指摘し、その強迫観念には根拠がないことを示しています。フランスには、ライシテという独特の政教分離概念があり、2004年に公立小中高校で宗教的表章の着用を禁止する法律ができました。法律はすべての宗教の表章を対象としていましたが、実際に大きな影響を受けたのはムスリム女性、特に公立小中高等学校で学ぶムスリム女子学生だったことは広く知られています。とりわけイスラームに対するまなざしが厳しくなるなかで、リオジエさんは他者の宗教を迫害することのない、より寛容なライシテを説き続けています。そのために、より原理主義的ともいえる強硬なライシテを主張するカロリーヌ・フレストのような論客と激しい論争を展開したこともありました。

2008年以来、駒場キャンパスは、何度にもわたり、宗教学の大家であり、排除のライシテではなく共生のライシテを説くジャン・ボベロさんをお招きしました³。ボベロさんと共著もあるリオジエさんに今日ご登壇いただくのは偶然ではありません。リオジエさんにはすでに20冊近い著作がありますが、そのうち日本語に翻訳されたのは、ジャン・ボベロさんとの共著『〈聖なる〉医療：フランスにおける病院のライシテ』と、今回のラウンドテーブルのテーマとなった『男性性の探究』です⁴。いずれも、伊達聖伸さんが翻

² Raphaël Liogier, *Le mythe de l'islamisation. Essai sur une obsession collective*, Paris, Seuil, 2012.

³ 以下のブックレットを参照。羽田正編、ジャン・ボベロ他著『世俗化とライシテ』UTCP Booklet 6、UTCP、2009年。HANEDA Masashi, Jean BAUBÉROT, al., *Sécularisations et laïcités*, UTCP Booklet 7, UTCP, 2009.

⁴ Jean Baubérot, Raphaël Liogier, *Sacrée médecine - Histoire et devenir d'un sanctuaire de la Raison*, Paris, Entrelacs, 2011. (ジャン・ボベロ、ラファエル・リオジエ『〈聖な

訳に関わっています。

『男性性の探究』には大きな反響があり、フランスのメディアでもたびたび取り上げられ、英語にも *Heart of Maleness* というタイトルで翻訳されています⁵。リオジエさんが『男性性の探究』のような著作を著されたのは少し意外でした。2017年のワインスタイン事件をきっかけにアメリカで燃え上がった #MeToo 運動は広く知られています⁶。運動は、「# 豚野郎を告発せよ (#BalanceTonPorc)」というかたちでフランスにも波及しました。男としての自分はそれをどのように見て考えるべきなのか？ 都会人で、西洋人で、裕福で、白人で、異性愛者の自分はそれについて語る資格があるのか？ リオジエさんが、自分が発言することの正当性を疑いながら執筆したのが『男性性の探究』にはほかなりません。今度はその著作を、同じく正当性を自問しながら伊達さんが翻訳しました。今晚は、私もまた正当性を自問しながら、ラウンドテーブルの司会を務めることにいたします。

フランス語のタイトルから、私は『男性性の探究』を『男性の性（さが）の核心へ』、あるいは『オスの業の核心へ』とも翻訳したい誘惑に駆られます⁷。リオジエさんが書かれているように、あまりにも「女性を見て欲望するよう条件づけられてきた」男たち、そして男性優位を保証するものが次々と失われていくなかで、男性支配にしがみついた男たち。リオジエさんによる分析は、男性社会の告発でもあり、また男性性にしがみついてみずから不幸になっている男たちへの問いかけでもあります。その意味で、この著作は男性にも、いや男性にこそ、強く語りかける著作だと言えるかもしれません。

る) 医療：フランスにおける病院のライシテ』伊達聖伸、田中浩喜訳、勁草書房、2021年)、Raphaël Liogier, *Descente au cœur du mâle*, Paris, Les liens qui libèrent, 2018。(ラファエル・リオジエ『男性性の探究』伊達聖伸訳、講談社、2021年)

⁵ Raphaël Liogier, *Heart of Maleness : An Exploration*, tr. Antony Shugaar, New York, Other Press, 2020.

⁶ #MeToo というハッシュタグは2007年から存在していた。映画プロデューサー、ハーヴェイ・ワインスタインが告発されたのを受け、女優アリッサ・ミラノが性的な嫌がらせや暴行を受けた女性に対してそのハッシュタグで証言するよう呼びかけたことがきっかけとなり、国境を越えた運動となった。

⁷ 原題 *Descente au cœur du mâle* において、*mâle* は動物の「オス」にも用いられる名詞である。また、*mâle* の同音語に *mal* (悪、病弊、痛み) があるため、原題には *au cœur du mal* (悪の核心へ) という慣用句が掛けられているように読める。

本日のラウンドテーブルは、大嶋えり子さんと隠岐さや香さんをお招きしておこなわれます。お二人を簡単にご紹介します。

大嶋えり子さんは、大学入学前の大部分の期間をフランスとベルギーで過ごしました。ご専門はフランス政治、国際関係論、特に植民地と移民に関する諸問題であり、現在、金城学院大学・国際情報学部講師、早稲田大学地域・地域間研究機構招聘研究員として活動されています。共著に、『排外主義を問いなおす——フランスにおける排除・差別・参加』⁸、論文に「フランスにおける「共同体主義」とはなにか——共和国モデルの聖性と背教」⁹などがあり、フランスにおけるアルジェリアの記憶についても多数の論文を発表されています。

隠岐さや香さんは、名古屋大学経済学研究科教授。18世紀フランスの科学史がご専門です。著書に、『科学アカデミーと「有用な科学」——フォントネルの夢からコンドルセのユートピアへ』¹⁰という大著があります。また、『文系と理系はなぜ分かれたのか』¹¹という著作では、大変興味深い問いを立てていらっしゃいます。日本は理系と文系の男女比が大きく異なる国であり、大多数が工学部に進学する東京大学理科I類などでは、35名程度のクラスに女子学生は3名程度でしょうか。そのことを考えると、隠岐さんの問いがジェンダーの問題と深く結びついていることが分かります。

大嶋えり子さん、隠岐さや香さんは、いずれもフランス事情に大変詳しい方々なので、リオジエさんとの議論がとても楽しみです。

では、紹介は以上にして、まずリオジエさんに『男性性の探究』についてお話していただきます。リオジエさん、どうぞ。

⁸ 中野裕二、エレン・ルバイ他『排外主義を問いなおす——フランスにおける排除・差別・参加』、勁草書房、2015。

⁹ 大嶋えり子「フランスにおける「共同体主義」とはなにか——共和国モデルの聖性と背教」、『多文化共生研究年報』第17号、29-37頁、2020年。

¹⁰ 隠岐さや香『科学アカデミーと「有用な科学」——フォントネルの夢からコンドルセのユートピアへ』名古屋大学出版会、2011年。

¹¹ 隠岐さや香『文系と理系はなぜ分かれたのか』、星海社新書、2018年。

『男性性の探究』 執筆のきっかけ

ラファエル・リオジエ：まず最初に、このように招待していただいたことを大変嬉しく思っており、この会を組織して下さった方々に深くお礼を申し上げます。日本に来ることは、ずいぶん前から私の願いでした。もちろん、本当に日本に来ることができていればさらに嬉しかったのですが、残念なことに、実際には日本からは離れた場所にしながら日本に来た、つまり今日フランス語で言うところの *distanciel* で日本に来ているわけです。フランス語の *distanciel* (遠隔)、*présentiel* (対面) をどのように日本語に翻訳するか知りませんが……。増田さんがあげてくださった著作を通じて、また本日のように遠隔で日本のみなさんに話しかけられるだけでも、すでに幸せです。日本への第一歩を踏み出し、とても嬉しく思います。

私についてとても詳細な紹介をして下さった増田さんにお礼を申し上げます。彼が述べたことを聞き、私の著作が何らかの役に立ったと考えることができました。というのも、増田さんは、司会の担当を決断する際に男性としてのみずからの立ち位置を問いなおしたと言っているからです。そして『男性性の探究』の素晴らしい翻訳をして下さった伊達さんも、自分がたして翻訳してよいのかどうかをみずから問いかけたと言われているからです。要するに、誰もが自問しました。私の本のアンビションは、まさに人が自問するよう仕向けることでした。自問して下さったのはとてもよいことでした。問いをうながすことが私の本の主要目的だったからです。もちろんやるべきことはたくさんあります。しかし、自問することは、私の著作の最初の効果としては悪くありません。

私は、発表を五点にまとめておこなうことにします。最初の点については本のなかでははっきりとは言っていませんが、読んでいただければ類推できるでしょう。それは、私がこの本を書くよう導かれた、まさに自問するよう、自分自身を問いたですよう導かれた個人的な理由です。

第二点は、この本を書くことになった「知」のレベルの動機ですが、2017年からさかんに話題になっている #MeToo 運動が、私が見るに、曲解されていたという点です。逆説的にも、人々が語れば語るほど理解が怪しくなり、不明瞭になり、論争がはじまり、そして論争ではしばしば起こるようには、不毛な論争になってしまうという感じがしました。だからこそ、私自身

も具体的な男性として、問題の周縁にとどまるのではなくその問題の核心に
いなければならないと思います、自分の本を *Descente au cœur du mâle* (『男性
性の核心へ』) と名づけたのです。

私はメディアで展開される議論が問題の核心を突いていないと主張して
いるのですが、第三点では、「では何が問題の核心なのか？」を述べることに
します。メディアの盛り上がりをはるかに超えた問題の深い意味、メディア
の盛り上がりのせいで見えづらくなっている深い意味、つまり問題の「人類
学的」な意味は何かという点です。

そして第四点は、なぜこの運動が他の時点ではなく、いま起きているのか
に関わっています。というのも、「今日」、「昨日」という語彙を用いるなら
ば、男性支配は明らかに今日はじまったものではなく、昨日はじまったもの
でもなく、一昨日はじまったものでもありません。では、運動はなぜとりわ
け「いま」起こっているのか？ というわけで、「いま」起こっている理由
をいくつか挙げてみたいと思います。

そして最後に結論です。行き着くのは、「この男性支配の原因は何なの
か？」という問いです。なぜ何千年も前から男性支配の文化が構築されてき
たのか？ その現象は自然なもののように見えるかもしれませんが、それほ
ど自然なことではありません。ほとんどの哺乳類ではむしろ逆のことが起き
ているからです。むしろ、メスが支配しています。ではなぜ、特に人間は、
現に見られるような文化を構築したのでしょうか？ 巨大な問いなので、今
回は軽く触れるだけにとどめておきます。

というわけで、まず私の『男性性の探究』執筆の動機となった個人的出来
事から始めましょう。それ自体はかなり平凡な出来事で、友人の一人、とて
も親しい友人の一人で、フランスの、かなり重要な職にある外交官、そして
若くて、成功した人で、自己表現の面ではまったく問題を抱えていない女性
とのあいだで起きました。私は彼女と #MeToo 運動について話をしていた
のですが、いわば自分が語っていることを十分に知っている男性として話し
ていました。端的に「男がしがちなように」と言ってもよいかもしれません。
私は話し、説明し、批判し、同時に自分はフェミニストであるという姿
勢を顕示していました。というのも、いずれにせよ今日、フェミニストであ
ることはよいことだとされているからです。

すべてがうまくいっていましたが。しかし、会話が進むにつれて、彼女が次

第にイライラを募らせていくのに気がついたのです。そのような態度をとるのは、彼女らしくありませんでした。とりわけ、お互いに旧知の仲であるこの私に対してはそのような態度をとることなどそれまではありませんでした。しかし、彼女のイライラはさらに募り、私に対して次のように言って会話を打ち切ってしまったのです。「けっきょく、この件については、あなたも他の人たちと同じね」と。先ほど増田さんが私の紹介の際にあげてくださった専門分野に言及しながら、彼女は続けました。「あなたはアイデンティティ問題、イスラーム問題などの専門家で、マイノリティや移民といった問題ではとてもいいことを言う。でも、この問題については何にも分かっていないと言わせてちょうだい。あなたは自分が知らないことについて話している」。それを聞いて、私は少し侮辱されたように感じ、少し気分を害しました。さらに、彼女は次のように付け加えたのです。「あなたはきっと#MeTooのツイッタースレッドを読んでさえいないでしょう。」

告白すると、私はそのとき、自尊心を傷つけられた男がするように嘘をつき、次のように答えました。「もちろん読んでいるよ。もちろんそれこそ基本だから。ぼくは科学者であり、研究者なんだから読んださ。」しかし、彼女は正しかったわけで、私は読んでいませんでした。ただ、そのツイッタースレッドに何が述べられているか分かっているつもりになっていました。私は、女性たちが#MeToo運動について何を言っているか知っているつもりになっていただけだったのです。私も他の人々と同じようにニューヨーク・タイムズ紙、フランスのル・モンド紙——ル・モンド紙はフランスの重要な新聞です——、そしてその他の新聞で記事を読んでいたせいで、そう思っていたのです。

私もそれなりに好奇心を持っています。科学に従事している人間でもあります。その同じ晩、遅まきながら問題のスレッドを見てみました。特に、友人とのやりとりを受けて、私がおかを見過ごしていないかを確認してみました。すると確かに、運動の内容を私が完全に取違えていたことに気がつきました。しかし、気がついたのはそのことばかりではありません。同時に、私が友人に対してしていたのと同じことを、メディアもしていたことに気がつきました。つまり、ほとんど誰もツイッターのスレッドを読んでいなかったのです。もちろん、「誰も」というのは「一般に」ということであり、文字通り「誰も」読んでいないということではありません。しかしこの件につ

いては、大部分のジャーナリスト、さらには #MeToo 運動の専門家を自称するジャーナリストでさえ、運動の真の核心をなす #MeToo 自体で起きていることを具体的に読みに行ってはいませんでした。そして、さまざまな事件、とりわけワインスタイン事件ばかりを取り上げていました。彼らの関心は、もっぱらスターたちをめぐる事件や訴訟であり、#MeToo のスレッドで語られていることにはまったく対応していない無数の事柄へと向いていってしまったのです。要するに、彼らは以前の私と同じでした。そのような経緯で、私は私自身の解釈の問題——その問題は、当時の社会でかなり一般的でした——から発して『男性性の探究』を書こうという考えにたどり着きました。

けっきょく、あのハッシュタグのなかには何があるのか？ そう問うてみて、私は他の主題でもひらめいたことがある直感、この件でもけっこう当てはまる直感を得ました。「#MeToo 運動はラディカル (radical) だが、けっして極端な (extrême) 運動ではない」という直感です。「ラディカル」というのは、問題の根源に達する動きのことです。しかし、ラディカルであるとき、極端 (extrémiste) である必要はありませんし、暴力的である必要もありません。そもそも、この言葉自体がすべてを物語っています。たとえばある平面に対してラディカルであるとき、人はその平面のまんなか、中心にいます。一方、極端であるときは、ほとんど主題から外れていて、周縁に、ほとんど問題の縁にいます。それは極端な議論、テレビでよく見られるような討論です。しかし、#MeToo 運動のスレッドを読むと、私は何度も学生や研究者とともに確認したのですが、そこにはたとえば告発もなければ、特定の個人への言及もほとんどありません。もちろん、何名かのスターが取り上げられ、いくつかの告発がありますが、それはわずかなものです。数百万のツイートの1%にも満たないのです。

ところが、人は #MeToo 運動をどのような運動として思い浮かべるのでしょうか。「男に対する告発」です。人はすぐさまそう思い浮かべるのです。でも、告発のスレッドは1%もありません。運動の現実とメディアで語られていることのあいだのギャップを想像できますか？ 現実はどうなのか？ #MeToo は、男性を刑務所に入れるという要求ではまったくありません。すべてを刑事告発すべきだなどという要求ではありません。現状でも罪を犯した人々はもちろん裁かれ、刑務所に行かなければなりません、

#MeToo 運動は、それ以上のこと、それを越えたことを求めているわけではありません。運動は、男性が女性の身体を見るまなごしを根本的に変えることを求めているのです。

この問題にはのちほど立ち戻ることになります。というのも、男性の目に映る女性とは何か、男性の目に映る女性の身体とは何かという問題はきわめて重要だからです。男性のまなごしはどのように機能するのか、男性の幻想はどのように作用するのか、という問題ですね。

そのまなごしを批判することこそラディカルであるということであり、繰り返しますが、それは暴力を必要としません。ところが、要するに単にラディカルであるという事実が、時に極端さよりもはるかに耐えがたく感じられてしまうのです。相手が極端であるとき、人はしばしば自分の責任から目を背け、他のことを話すこと、真の問題を避けることができってしまうからです。

『男性性の探究』執筆をめぐる「知識」レベルの動機

リオジエ：ここから、第二点です。私は以上に述べてきたことを総括する本を作りました。話を逸らす作法、つまり、理解するのが難しすぎて理解していないふりをする作法について、いわば総括する本です。それは、精神分析の診察を受けるたいていの患者が見せる行動に少し似ています。真の精神分析では、精神分析医はできるだけ話しません。なぜなら、話すのはソファの上にいる人、そこに横たわっている人の無意識だからです。喋りすぎる精神分析医は、問題は解決できません。どうしてなのか？ なぜなら、実際には、自分の精神の病が本当は何であるかを知っているのは患者、つまり病気の中心にいる人ですが、その人はそれを名指すことができず、名指すことを拒否しているからです。彼には痛みが大きすぎて（＝彼は男でありすぎて）¹²、それを名指すことができないのです。

彼は名指すことを回避し、回避の戦略を用います。その戦略の一つが、運動の極端さをあげつらう議論です。#MeToo は「恐るべき男性狩りだ」、「もういちゃつくこともできなくなる」——一時期、フランスではまさにそ

¹² 二通りの訳を付した部分の原語は、Ça lui fait trop mâle. 著作のタイトル同様、男性（またはオス）を意味する mâle と、悪や苦痛を意味する mal が掛けてある。

う言われていました——、「騎士道的な女性への接し方はフランス文化の一部だ。フランスではもう騎士のようにふるまう権利がなくなってしまう」、「#MeToo は極端な運動である」と。むしろ男性主義的な世界の見方こそ極端なのに！ しかし、ラディカルな性格を見なくてすむよう、いわばそれを黙殺しようとして、人はショックを受けたと主張するのです。よって、私はこれらの回避に関する無意識的戦略をすべて分析してみることにしました。戦略はそれぞれの文化によって異なりますが、普遍的なのは「支配」でした。それは、少なくとも新石器時代以来、時間を通じて普遍的であり、空間的にも、つまり文化が異なっても普遍的でした。その一方で、文化によって回避戦略は多様でしたが。

責任逃れをして問いを逸らすこと、それには次のようなやり方があります。「ああ、われわれフランス人には男性支配の問題など存在しない。なぜなら、われわれは女性に対する騎士道的作法を身に付けていて、女性を適切に扱うからだ」、「実際、問題はわれわれではなく、アメリカ人だ。アメリカ人はあのような連中であり、女性を尊重しないからだ」、あるいは、「問題は移民であり、イスラーム教徒だ。というのも、イスラームにははっきりとした女性蔑視が見られるからだ」、等々……。というわけで、他者に責任や有責性をなすりつけ、自分は責任逃れをするわけです。

アメリカで、人々は責任逃れのための別の戦術を見つけました。彼らは #MeToo 運動を他のどの国よりも盛んに取り上げますが、それはひたすら訴訟を起こすというかたちをとります。まあ、まったく訴訟だけとは言えません。もっと道徳的でなければならないということも語りますから……。彼らは一方では古典的なアメリカのピューリタニズムを強調し、他方ではそれと平行して訴訟を起こすのです。罪を犯した者たちを収監すべきだ、そして被害者たちに補償を支払うべきだ、と。まるで、それで根本的な問題が解決するかのよう。しかし、それは運動が求めているものではありません。犯人が刑務所に入ることはよいとして、それで社会構造が、そして（男性による）害悪の根本が変わるわけではありません。では、#MeToo 運動は何を求めているのか？ 個々人に罪悪感を抱かせることよりも、社会全体、さらには人間社会全体に、しかも男性だけでなく女性にも、自分たちの責任を意識させることです。なぜなら、たとえ女性が何千年ものあいだ、やむをえず支配されてきたとしても、支配関係の絆そのものに参加するという仕方で彼

女たちも支配構造に参加しているからです。

ということで、……なんとと言えばよいか……ある種の幻想的な関係性が存在していて、それこそが #MeToo が標的としているものなのです。#MeToo がめざすのは、集団心理療法として機能する体験の共有であり、女性たちが自分の体験したことを表現するというかたちでそれをおこないます。彼女たちは、増田さん、伊達さん、そして私と同じように、自分自身に問いかけるのです。そして、自問するということは、問題の核心に達するための最良の方法です。アプリオリに知っているとは主張するのではなくみずから問うこと、そしてすぐには目に止まらないほど深部にあったものを見えるようにすること、それこそ彼女たちがしていることです。彼女たちは、抑圧していた記憶を次のように意識化します。「しかじかの男は私に対してしかじかの行動をとった。友人だと思っていたのに、パーティーで性的なこと、あるいは性的ではないが嫌なことを強要した」。そして、彼女たちは自分自身に問いかけます。「なぜなのか？」と。それぞれの個人を超えて「なぜなのか？」が広がっていきます。そして彼女たちは、男の欲望に自分たちはなぜ服従したのかと、いまでは受け入れられないのになぜ当時彼女たちは受け入れたのかと問うのです。

延々と連なる証言を通じて、彼女たちは自分の身に起こったことの性格を知るようになります。このような学習のプロセスがあるのです。だから、#MeToo 運動に対する以下のような批判は、私には不当に思われます。「おやおや！ しかしなぜ彼女たちは今さらそんなことを言うのだろう？ なぜそれが彼女たちの身の上で起こった 15 年前に言わなかったのか？ なぜレイプされた 15 年前ではないのか？」それは、まさしく当時の彼女たちが、自分がこうむったことが普通ではないことに気づかなかったからにほかなりません。それは、当時「普通」だったからです。当時、集団的な精神分析の作業はおこなわれませんでした。そしていま、経験を共有することによって、彼女たちは自分たちがこうむったことが普通ではないことに一斉に気づいたのです。彼女たちの集団的な気づきを語るために興味深いフランス語があります。réaliser という言葉です。日本語に相当するものがあるかどうかはわかりませんが、réaliser には「気づく」と同時に「現実のものとする」という意味があります。彼女たちにとってかつて現実でなかったことが「意識化」されたと同時に「現実化」されたのです。したがって、いまになって

彼女たちがようやく語り始めたのは、こんにち彼女たちが気づいたためであり、けっして偽善ではありません。#MeToo は気づきを助けるプロセスを提供する運動であり、男性支配を個人的かつ社会的に気づかせる運動なのです。これが第二の点です。

問題の核心

リオジエ：第三点では、問題の核心、すなわちこうした現象の深い意味を問うことにします。深い意味とは、新石器時代の少し前から、とはいえとりわけ新石器時代から、女性の十全な意志は男性によって認められていないということです。象徴的な意味で、女性は能動的な主体とみなされていないと言えるでしょう。彼女たちは、受動的な存在とみなされている。そしてその受動性は、いわば文化に書き込まれたものなのです。女性に、彼女たちの人格は受動的なものであるという考えが押し付けられました。女性的な資質は、たとえば慎ましきといった受動的な資質となりました。おおぜいの人々が、発言する女性はおしゃべりすぎると言い、否定的な評価を下しますが、男性の場合では逆に肯定的な評価となります。少し病弱であることさえも、か弱いことさえも、それ自体は客観的に肯定的な資質ではないはずなのに女性的な資質となります。そして、受動的なものはすべて女性を定義する資質となり、そのあげく女性の身体までもが、受動的な対象と見なされるにいたります。すなわち享受すべき対象、獲られるばかりになっている対象、享受を与えてくれるけれど、それ自体は積極的に享受の主体とならないという意味で享受の対象とされるにいたるのです。一部の社会で女性性器切除がおこなわれるのは、そのためです。自分の身体を楽しむことのまさに核心である性行為においてさえも、女性が積極的に快楽を享受することはスキャンダルだからなのです。

さらに、さまざまな文明の象徴体系のなかで、女性は月、男性は太陽として表されています。これを理解するのは簡単で、太陽は光を生み出し、月はというと当然ながら太陽からの光を受けて、いわば受動的に光を放ちます。社会の構造がそっくりこの能動的／受動的という対立に基づいていることがわかります。

「享受」(jouissance) もまた、非常に重要な言葉です。なぜなら、それは政治的権利の享受、身体的権利の享受、法的権利の享受にいずれにも用いら

れる言葉だからです。それは、最も外的な部分ではいわば法的な意味を持っており、一般常識においては、生の、私の実存の、世界の十全たる享受を表し、より深くは性的な意味での享受、すなわちオーガズムを表わす言葉です。ところで、17～18世紀以来、女性には段階的に数々の享受が与えられてきました。しかし、それは一番外側の円のなかで一種の法制定の作業をおこない、次いで世界の具体的な享受、おおまかに言えば経済的な平等の作業をおこなってきたかのように進みました。法を制定しても、それが実際に適用され、効果的であるためには、平等を宣言するだけでは十分ではありません。しかし現実には、この二つのレベル（法的な意味での享受と具体的に経済的平等を享受すること）は、第一の享受、さまざまな享受の基礎となる享受、すなわち自分の身体の享受を取り残していたのです。

実際に、まだ欠けているのは身体の享受なのです。近代化の過程の、私たちがあるこの段階でも、それは実現されていません。まさに、#MeToo運動はその点を問うているのです。

#MeToo 運動——なぜいまなのか？

リオジエ：さて、最後に、第四点と結論をまとめて述べてみます。なぜ、いまそれが起きているのか？ 状況によるいくつかの理由があります。その理由のなかには、たとえば、あくまでもたとえばですが、ドナルド・トランプのように支配的な仕方（男）を代表し、体現する人物が権力の座に就いた、しかもその男性主義的な言説のおかげで権力の座に就いたというものがあります。男性支配は、彼の政治プログラムの一部であったとさえ言えるでしょう。そのため、彼のハラスメントを告発することさえできませんでした。彼はいわば「私はこのような人間なのだ」と憚ることなく言いながら、公然とハラスメントをしていたからです。それは、選挙キャンペーンの一環でした。そのため、数年前から存在した#MeToo運動も、そのキャンペーンの最中はインパクトがなかったか、わずかしかなかったか、それは無意味なことではなく、彼に対する一種のリアクションからだったのです。

しかし、真の論点は構造的なものです。構造的には、私たちは近代化のプロセスの果てにたどり着いています。平等は現実となったように主張されていますが、実際には核心部分が解決されていないままです。核心部分、つま

り幻想そのもの、最も深い幻想が残っているのです。その核心部分を解決しないと、平等が達成されたように見える部分にも脆さが残ってしまいます。これが私の結論です。

ところで、この結論部分の最後の文に重ねて、次のような問いを立てることができるでしょう。「なぜ男たちはこのように支配することに執着するのか？」支配したいと思うのは、まさしく自然に支配することに自信がないからであり、そのために支配の文化を構築するわけです。それこそが、男性の問題点なのです。男性優越の文化を築くよう男たちを当初から仕向けたのは、無力感にほかなりません。だからこそ、男の世界は競争、つまり女性を前にしての、男同士の力関係で成り立っているのです。女性はそれを目の当たりにしています。そして、#MeToo 運動は、男性同士を拘束する支配への要求から男自身を解放する試みでもあるのです。

増田：リオジェさん、どうもありがとうございました。では、大嶋えり子さんにコメントをお願いいたします。

男性／女性という区別

大嶋えり子：金城学院大学の大嶋えり子と申します。このたびはこのイベントにお誘いいただき、ありがとうございました。特に増田さん、伊達さんに深くお礼申し上げます。また、本日は運営、また同時通訳のみなさまに支えられており、心から感謝しております。私のほうから簡単にコメントと質問をしてみたいと思います。

『男性性の探究』は「見たところ差別される側の人間ではない」著者が#MeTooをきっかけに「おもに男性について」「優先的に（…）男性たちに対して」書かれたものとされています。私はフランス政治が専門ですので、その立場からフランス社会および日本社会について気になったポイントについて指摘をさせていただきます。

まず、男女を分類することについてお話しいたします。男性支配の克服において、本書で語られているとおり法的平等の実現は極めて重要な要素でありつつも近代において女性は「制度化された真の権力へと接近することはできなかった」（97頁）とされています。フランス社会における法的平等を実

現する改革のなかで、女性参政権が挙げられることはもちろんですが、パリテの導入は世界的にも注目されました。1999年の憲法改正により、選挙による女性の公職へのアクセスをより容易にすることが規定されるなど、重大な法制化が1990年代の終わり以降に見られました。日本では、女性の国会議員が少ないことがたびたび話題となっており、日本版パリテ法の必要性が叫ばれつつも、実現には至っていない状況です。このような状況自体は日本が抱える問題なのですが、そもそもフランスのパリテ法にも問題が残っていると云えるでしょう。

本書では、#MeTooが「波及効果を及ぼす運動であって、性的な選択(choix sexuels) (自分が生きたい性を自由に生きること)と性化された選択(choix sexués) (自分に合致する性的アイデンティティにおいて承認されること)に関する差別全体の批判に有益だ」としていて、多様な性的指向および性自認を前提としていますが、全体的に性別二元論に基づいているように読める記述も多いように思います。なぜパリテ法と関連させてこの点に言及するかといえば、パリテ法自体がそうした性別に対する認識によって支えられているからです。フランス共和国がかかげる平等の理念に反することなく、各政党から候補者を男女同数とすることを法によって強制するには、「人種」や「階層」、「エスニック・グループ」などといった社会的な「カテゴリー」とは異なり、「女性」と「男性」の区別が、普遍的に人間社会を構成する固定的な要素であり、あらゆる「カテゴリー」に対し優位であることを前提としなければなりません。

パリテ法を支える論拠の問題にとどまらず、「女性」と「男性」という固定的な分類が抑圧的であったことを踏まえた場合、どのように男性支配を克服し、男女平等を実現できるとリオジエさんがお考えなのかをうかがいたいと思います。

非混成という選択

大嶋：次に、女性限定という、フランス語では non-mixité、「非混成」の状態についてお話しします。本書の目的は「女性について」書くことでも、「フェミニズムの教訓を与える」ことでもないと言われていて、男性支配を語りつつも、男女を分離する「非混成」と呼ぶ状態に次のように言及しています。

最もリベラルと言われる社会でも、性別に基づくアパルトヘイト計画から免れているわけではない。ドイツの大手鉄道会社は2016年3月に女性専用車両を設けることを提唱している。このような女性専用車両は日本では2001年からすでに存在する。女性を保護すると主張することは問題の解決にはならず、むしろ差別的な偏見を助長し強化する。女性達の求めているのは、男性に守られることではなく——彼女たちはそのことが自分たちの自由にとどのような制約をもたらすことになるかをよく知っている——、条件無しで尊重されることなのである。(邦訳 32-33 頁)

#MeToo が提起した問題を解決する手段として、男女の分離は不適切であるという立場がここで表明されていると思います。たしかに、女性限定空間という非混成の状態が男性支配に対抗する上で最善策や解決策とはならないかもしれません。性暴力や、ひいては男性支配の根絶を目指すうえで、分離した形で男女が活動することがよいとは手放しには言えないでしょう。

また、属性に関わらず平等な個人が社会を構成し、共生するべきだという考えがフランス社会では有力な社会編成の理念となっています。そのため、「女性」や「男性」、あるいは「白人」、「非白人」などといった分類や属性に基づいて、利用できる空間や参加できる場を区別することは差別的であり、そのような営みは避けるべきである、とされています。女性のみが許される場はフランスで批判的となりやすいと言えて、たとえば、2016年にニューイ・ドゥブーで女性およびジェンダー・マイノリティのみに開かれた、つまりシス男性の参加を拒否した会合が批判されたことは記憶に新しいかと思います。

留意すべきはこれが新たな運動の手法なのではなく、フランスにも女性のみの会合の歴史があった点でしょう。革命期には、女性が様々な政治参加や社会参加の場から排除されていたため、女性同士が意見交換を行うための空間がありました。戦後においても、フェミニスト運動で参加者が女性に限定された会合がいくつも開催されました。潜在的な加害者から離れた安全な場の構築として、とりわけ戦後の運動では非混成という手法が用いられたました。

まずは、こうした非混成が安全な場を構築するのに寄与するという点について指摘をしたいと思います。『男性性の探求』は非混成を忌避しています

が、女性限定空間の効果を改めて検討する必要はないのでしょうか。

日本における女性専用車両の導入経緯を見ると、1947年に婦人子供専用車両が混雑から女性と子供を守る目的で導入されました¹³。ここではたしかに男性が女性（および子供）を守る、という家父長的な構図が見られます。しかし、1973年にこれが廃止されたのち、新聞への投稿などにおいて電車内における痴漢対策として女性専用車両の導入を女性が求めるようになりました。また、女性専用車両導入を検討する新聞記事で女性記者が、女性専用車両が根本的な解決策にならない点も指摘しています。2000年12月になると京王電鉄で酔客による迷惑行為を防止するために試験運転が開始し、2001年から本格的に通勤時間に導入され、その後ほかの鉄道会社でも導入が相次ぎました。ただし、女性専用車両の導入経緯において、女性の意見が積極的に採用されたとは言いがたく、男性を痴漢冤罪事件から守るために導入された側面も否定しがたいことがわかっており、女性たちが自分たちを性暴力から守るための場を作り上げることすら、男性を守る名目がなければ困難になっているということは指摘しておくべきでしょう。

こうした経緯を踏まえると、一部の施設や会合を女性専用にすることが「アパルトヘイト」や「ピューリタンな逸脱」（33頁）だと言い切れるのか疑問に思えます。本書が重視する女性の「意志」に基づき、女性限定の安全な場が構築されることをどのようにマジョリティの男性は正当に否定できるのでしょうか。牧野（2019）が論じるように「男性〔が〕、痴漢被害を娯楽として楽しみ、声を上げた女性の容姿をあげつらい、女性の痴漢被害を軽く見積もってきた」（229頁）ことに鑑みれば、「女性専用車両という痴漢被害に遭わないためのシェルター」（226頁）は男性支配への有効な暫定的対策なのではないでしょうか。

男性支配を考えるうえで男女を分離する非混成を批判するにしても、デルフィのように「平等なき混成（mixité sans l'égalité）」を前提として「押し付けられた非混成（non-mixité subie）」と「積極的非混成（non-mixité choisie）」を区別するべきではないでしょうか¹⁴。

¹³ 詳しくは以下を参照されたい。牧野雅子（2019）『痴漢とはなにか―被害と冤罪をめぐる社会学』エトセトラブックス、209-213頁。

¹⁴ Delphy, C. «La non-mixité : une nécessité politique», Les mots sont importants,

内発的な区別／外発的な差別

リオジエ：大嶋さん、ご意見ありがとうございました。最初の質問を正しく理解できたかどうかはわかりませんが、次のような質問だと理解しました。レイシズムなど他の種類の差別などがある場合、どうやって両性間の支配関係と戦うことができるかということですね？

大嶋：最初の点は、女性と男性で分類すること自体が、抑圧的ではないかということ。さまざまなジェンダー・アイデンティティがあるなかで、男女という固定的な分類が抑圧的であったにもかかわらず、そういった抑圧的な分類にのっとったかたちでパリテ法が制定されてきたということは、男女平等を実現するために仕方がなかったという意見もあります。両方の解釈がありますが、そのような事態についてどのように考えるかという質問でした。

リオジエ：よく分かりました。詳しく言っていただき、ありがとうございます。私たちは、さまざまなアイデンティティというものを十分に区別していないと思います。性的なアイデンティティもあれば、「人種」は概念的な構築物であるので用いませんが、民族文化的 (ethno-culturelle) なアイデンティティがあります。つまり、アラブ人は存在しますが、「アラブ」という言葉を口にするとき、フランスでは往々にしてそこに差別的な価値を込めています。アラブ人には文化があり、彼らが必要とする特定の事柄があり、差異があり、フランスで多数を占める人々とはもしかするとわずかに異なる存在様式を持っています。したがって、アラブ人自身が主張しうる区別そのものと、その区別に結びつけられる差別的な価値を混同してはならないのです。

差別とは、外側から押し付けられた価値観です。だからこそ、私は本の最後に「価値の転換」という言葉を使っているのです。つまり、触れるべきものは価値であって区別そのものではないということです。言わんとしているのは、二つの性が存在することには何の問題もありませんが、それぞれの価値はどうなっているのか、ということです。私が女性に受動的な価値を与えると、私は女性が何であるかを再定義したことになります。またそれによ

<https://lmsi.net/La-non-mixite-une-necessite> (2021年11月21日閲覧)

て私は女性を支配するのです。さらに、フランスの社会学者ピエール・ブルデュエが言ったように、重要なのは差異があることではなく、たとえ言語レベルにとどまるにせよ、その差異が階層的に分類されることなのです。この階層的分类は、多くのばあい格下げであり、人を格下げするものです。そして、それこそが女性に関わる問題なのです。人が「女性」と言うとき、それは格下げを伴う分類となります。最初の質問については以上です。ですから、価値に、価値の言説に、価値同士の関係に切り込まなければなりません。

非混成とアバルトヘイト

リオジエ：二点目について。これは非常に重要な問題です。男性からの暴力がどのようなかたちをとりうるかわかりませんが、振るわれるかもしれない暴力をいわば先取りして女性を守るために、女性によって要請された、あるいは要請されていない措置を採ることがあります。実際のところ、私はそのような措置に反対しているわけではありません。しかし、私の本の目的は、措置を講じなければならない原因を考察することでした。だからこそ、本は『男性性の探究』と題されているわけです。さて、暴力に対して、その暴力への回答としての、異なる車両に乗るという措置は、あくまでも結果に対する回答であって、原因をめぐる考察ではありません。そもそも、そんなことをしても、原因に対していかなる変化ももたらしません。それは治すことはせず、こう言ってよければ、単なる対症療法です。原因にはまったく触れないのです。私が警告を発したかったのは、善意から始まった、そしてある時点では有効と思われた措置、すなわち暴力が存続するかぎりの一過性の措置としては有効と思われた措置が、長期的には抑圧の手段となりうるということです。

戯画的な例として、別の例を挙げておきましょう。ブルカは、エジプトにおいて女性を守るために使われていました。貴族階級の女性たちが一定の時間以降に外出する際、売春婦や社会的地位の低い女性と混同されずに自由に外出できるように、ブルカを着用していました。それは、彼女たちに触れてはならないというサインだったのです。つまり、サウジアラビアのブルカとは逆に、彼女たちを守るためだったわけです。

したがって、ここでも重要なのは、その措置にどのような価値を与えるか

なのです。つまり、一過性のものであれば、客観的に存在する暴力から女性を守るという目的があるので、問題はありません。その一方で、長期的な目標を持ち続けなければなりません。長期的な目標は、その暴力が社会の構造からなくなることです。それこそが、『男性性の探究』が語っていることです。「気をつけろ！ アファーマティヴ・アクションのように見えるものがアパルトヘイトにならないように！」——というのも、社会はそのたぐいのことをするのがとても得意だからです。つまり、武器を要求した当の人々に対してその武器を向けることが、です。

ところで、補足として申し上げますと、私は意図的に「アパルトヘイト」という言葉を使いました。なぜなら、南アフリカの人種主義的分離のシステムにおいて、アパルトヘイトは公式には異なる文化を尊重する制度として正当化されていたからです。黒人用と白人用のトイレを作ったのは、否定的な仕方では黒人と白人を差別するためではなく、トイレにおいてさえ両者は同じ習慣を持っていないからだというわけです。アパルトヘイトはそのように正当化されていたのです。

注意していただきたいのは、私が切り込もうとしているのは物事に付与される価値だということです。だからこそ私は、フランスでは同じような仕方で、しかしいわば逆方向に、スカーフをかぶる権利を擁護しているのです。大切なのは、物事に与えられた価値なのです。私が言いたいのは、それは女性の願望なのか、彼女たちの選択なのか、それとも押し付けられたものなのか、ということです。アパルトヘイトなのか、アパルトヘイトではないのか？ ひとまずは以上です。ご質問に対するお返事になっているとよいのですが。

増田：どうもありがとうございます。では、さっそく次のコメントに移りたいと思います。隠岐さや香さん、お願いいたします。

支配者としての男性／被支配者としての男性

隠岐：ありがとうございます。貴重な機会をいただき、あらためてみなさまにお礼を申し上げます。

三つの質問があります。リオジェさんのご本は、さまざまな宗教的なテク

ストや寓話に言及しながら、男性／女性という記号的かつ、象徴的な二項対立に触れ、分析をしているところに特徴があり、非常に宗教に造詣が深い方によって書かれたものであることが窺えました。特に #MeToo とこの論点を結びつけて提起されたことは意義深いと思います。また、リオジエさんが男性の立場から、「私」を主語にしてこのような書物を書かれたことが非常に重要な点だと思っております。このような点で、読んでいてとても楽しい本でした。

私自身は、フランス科学史の研究者であり、科学アカデミーの歴史を研究してきましたが、主に男性知識人共同体の歴史を研究してきた者でもあります。また、現代のジェンダーと科学の問題にも関心があり、男性同士の関係性について大変関心を持っております。こうした立場からの質問だと思ってください。

一つ目の問いです。歴史のなかの「男性」とは誰か、ということです。「男性」と言ってもいろいろな人がいました。たとえば、古代ギリシアには同じ男性でも自由民、すなわち政治に参加できて他人に所有されない男性と、そうした権利を持たない奴隷がいました。そして両者では性的な所有の権利が異なっていたかと思えます。リオジエさんのご本にはプラトンやアリストテレスが引用されていましたが、彼らが男について語る時、主に自由民のことを念頭に置いているように思われます。奴隷の男性がどこにいるのか分からないわけです。

何が言いたいのかといいますと、リオジエさんのおっしゃる男性性というのは、今も昔もどちらかという支配者の男性性と読み替えることのできるもの話ではないか、ということです。つまり、男性と女性という二つの区別がまずあったというよりは、支配者と被支配者という二つのカテゴリーがあった。そして支配者のカテゴリーに入れるのは男性の一部であって、なぜかその人たちが男性の全部であるかのように語られていた。ほかの人間は性的には男性であっても被支配者の枠に入っていた、ということではないでしょうか。

たとえばプラトンの『饗宴』においては、自由民の男性同士が男同士の恋愛について語ります。古代ギリシアの伝統においては、真の愛とは自由民の男性同士の愛を意味したようで、それはまさに女性排除の図式になっていました。ただ一方では、私の理解するかぎり、たとえばおそらくあったはずの

自由民男性と奴隷男性の性的関係は、その話から排除されているわけです。補足しますと、ここで語られていた自由民男性同士の恋愛も実はかなり限られた関係性を指していました。より正確に言うと、主に、年長者と若い人という序列関係のある愛だったのです。

つまり、過去から続く「男性による女性への支配」があったというだけではなくて、一部の支配者グループの男性がそれ以外の男性と女性を支配していた。その一部の人達が支配者としての「男性」像を作り上げて、支配者クラブに入れる人は誰かという品定めをする。そういう文化があったということのように思えるのです。そして、そのような支配の文化を止めた方がいいというのが #MeToo などが対峙している 21 世紀の課題であり、そのためには歴史の中で語られてきた「男性」、すなわち支配者クラブのメンバーが何者であるのかも問われなければならないのではないかと、ということです。

宗教的保守派との対話

隠岐：二つ目の問いに移ります。やや素人的な質問ですがご容赦ください。現代の各種メディアの報道を見るかぎり、宗教的な保守派と呼ばれる人々は、宗教を問わずに、ジェンダー平等や性的マイノリティに関する問題について後ろ向きであるように思われます。実際同性婚に関しては、ヨーロッパでも、あるいは韓国や台湾でもそうらしいのですが、宗教的保守、とりわけカトリック系の団体などが反対をしているように見える。また近年では、トランスジェンダーの権利に対してもやはり宗教的な保守派の人々は敵対的であるように思われます。日本でも似たような傾向が見られます。彼ら彼女らはどうしてそのようなスタンスをとるのか。

私は、男性性 (mâle) の問題と平行して、ここにもまた別に、取り組むべき課題があるのではないかと考えています。宗教的な保守派には男女含めさまざまなジェンダーの人がいるにもかかわらず、支配者クラブの男性たちの価値観と合流しているように見えます。

また、私が意識しているのは、心理学の「道徳基盤理論」というもので、道徳的判断、すなわち人の行動に対して善い、悪いの判断が生まれる時の基準について 5 つの生得的な道徳基盤が存在するという説があります。その詳細はここでは論じませんが、政治的にしろ宗教的にしろ、保守派と呼ばれる人々は、権威と純潔を重視する傾向があるようです。純潔は、「聖なるもの」

につながる部分があります。そして公平性、たとえば平等であるとか、あるいは人権が大事だとか、そういった議論では保守派の人々はあまり説得されてくれないと聞きます。私自身は完全に「保守ではないほう」の人間なのですが、その立場から日々の経験として感じるのは、この状況での対話はむずかしいということです。対話の糸口がつかめない。そこで、宗教の問題にお詳しいリオジエさんにぜひ、#MeToo の議論の今後のためにも宗教的保守派との対話の可能性について、ご意見をうかがいたいと思います。

#MeToo と性的マイノリティの男性

隠岐：最後の質問は、一つ目の質問と少しつながりがあります。フランスにおける #MeToo 運動の広がりについて、また、性的マイノリティや男性の性被害者がどのように #MeToo に関わっているのかについてご存じであれば、お聞かせください。私がなぜこの質問をするかといいますと、実は私が人生のなかで最初に直接聞いたレイプ体験の告白は男性からだったんですね。シスジェンダーのヘテロセクシュアルの人で、子どもの頃にレイプされたという話を聞きました。また、トランスジェンダーの性被害は深刻であることも知られています。

私の視点からの意見ですが、支配される側の人々は、同じではないにしても、互いにかなり似たような苦しみや差別の経験を持っているように思われます。ここでは女性と性的マイノリティと障害のある人——どう呼ぶべきなのか——、そういう人のことを挙げました。つまりこの社会にはいわゆる男性と女性がいるというよりは、支配者とそれ以外の人たちがいると感じています。

女性に対する性暴力——日本の状況

隠岐：そして、最後に日本の状況についてお伝えしたいと思います。日本は本当に酷い状態にあり、まだ、女性に対する性暴力の問題に脚光を当てること自体に課題を抱えています。それでも、近年、#MeToo の精神を引きつぎ、まさにそれを体現するような集会在各地でおこなわれています。その有名なものはフラワーデモと呼ばれています¹⁵。その背景にあるのは、日本の

¹⁵ <https://www.flowerdemo.org> 当日は写真資料を除いて紹介。

刑法の酷い状況です。日本の刑法は2017年、110年ぶりに改正されました。それまでの内容は19世紀のジェンダー観念を引き継いだもので、性暴力に関しては、たとえばレイプをしても被害者が告訴しなければ加害者は起訴されないという凄惨な法律でした。そのため被害を訴える勇気を持たずに泣き寝入りする被害者がとても多かったです。また、膣性交のみが強姦とされ、肛門や口を使う性行為は、強姦と見なされていませんでした。この改正によってやっと、それらも強姦と見なされるようになり、男性の性被害も告発される犯罪と認められました。

ただし、まだ問題点が残っています。加害者がはっきりとした暴行や脅迫、つまり殴るとか殺すぞという脅迫を行ったことを被害者が証明できなければ罪に問えないのです。そのため、性暴力の裁判では、被害者の証言や各種の証拠にも関わらず被告が無罪となる判決が相次いでいます。この現状を変えるため、運動は続いています。

最後は日本の酷い状況をお伝えしましたが、以上の質問にお答えいただければ幸いです。

古代ギリシアの市民権／近代の市民権

リオジエ：はい、ありがとうございます。非常に興味深い質問を三ついただきました。正直に言うと、私はそれぞれの点にとっても興味があるので、お返事するには講演会がもう一回必要なほどです。私の答えは必然的に少し簡潔なものにならざるをえないので、十分に満足いただけるかどうかわかりませんが、お望みならば後で話し合うこともできます。たとえば古代ギリシアについて、古代ギリシアの理性とは異なる現代的理性の意味について。要約しながらお返事してみます。

第一の点について。最初の点は、確かに、どう言えばいいのでしょうか、「男性」を云々するとき、男性そのものではなく、支配的な男性を語っているのか、つまり苦痛（害悪）をもたらす存在について、それがもたらす問題について語っているのか、ということですね。私が言いたかったのは、支配的な男性の行動の問題ばかりではなく、けっきょく社会を支配する男性主義（masculinisme）の問題だということです。すなわち、古代の用語、ラテン語の用語——ギリシア語ではありませんが、古代ギリシアでも多かれ少なか

れ事情は同じです——を使うならば、*vir*（男）という言葉からフランス語の *virilité*（男らしさ）という言葉が作られました。念のため喚起すると、*vir* という言葉には、「男」という意味もありますが、同時に「英雄」という意味もあります。それは英雄的であること、つまり戦士であることを意味します。それは、男性のなかで、本当の「男性」とみなされる男性と、「女性」とみなされる男性との間で競争があるということです。フランス語でも、ラテン語でも、ギリシア語でも、フランス語の *femmelette* を意味する言葉があります。「女々しい男」という意味です。なぜなら、あなたが言及した古代ギリシアの同性愛は、完全には現在の同性愛と同じではなく、つまり女性的な男性同士ではなく、英雄として、つまり強い男性としてお互いを望む男性同士であったことを忘れてはならないからです。ということは、*aristoi* として、つまり、エリートとして。

古代ギリシアでは、男性の領域から区別された *oikia* があります。それは、家族の秩序、まさにかまどの秩序、家庭の秩序であり、女性の領域であると言えますが、それは非常に受動的であり、あまり重要ではないとされてきました。意思決定がおこなわれるのは、そこではありませんでした——ここでもまた、受動性の問題が出てきます。そして他方には、アゴラ（言論の広場）としての *politikos* があり、そこでは意思決定がおこなわれ、権力を持つ男たちがいる場があるわけです。しかし、確かに男性の世界のなかにも、男性主義的な区別が存在し、より男性的ではない男性が排除されています。今日でも、学校の校庭などで女性的と見なされた男子生徒に対して、依然として同じことが起こっています。だからこそ、私は講演の最後に #MeToo 運動はこの点を考慮していると述べたのです。それはあるレベルで男性をも排除する男性主義から男性を解放しようという考えからです。この点を把握しておくことは非常に重要です。

あなたの最初の質問に対しては、とりわけ古代ギリシアにおける市民権と、18世紀以降のフランスで定義された市民権との違いを含めて、他にも言うべきことがあります。それは、ギリシアの市民権は個人的（*personnel*）な諸権利——*persona* とは、社会的な仮面です——であり、それぞれの社会的地位に応じて定義されるということです。たとえば、市民として生まれたので市民である私は、財産の所有権を認められた者でもあるということです。アリストテレスは、彼の人生のある部分において市民ではありませんで

した。権利は、社会的地位に直接依存していました。アプリアリに規定されていたのです。

18世紀にイマヌエル・カントによって、主観的権利という概念が構築されました。つまり、私は私の主観に基づいた諸権利を持っており、それらの権利は圧縮不可能であり、還元不可能であるということです。これこそ画期的なことです。「還元できない権利がある」と宣言した瞬間から、誰もが自分の権利を主張するようになる、しかし葛藤も起きる、ということの意味します。これらの主観的権利を、今日では人権と呼んでいます。しかし、実際には、それを人権と呼ぶだけでは完全ではありません。主観的権利には限界がないからです。権利を定義するのは私の主観であると言った瞬間から、私たちは移民にも、貧者にも、黒人にも、白人にも、そして女性にも権利を与えることになります。動物もまた権利の主体になりえます。つまり、主観的権利は人権にはとどまらず、その後さまざま権利が主張されるようになります。これこそカントにおける中心的な概念である超越論的主観性の含意です。すみません、哲学的な話になってしまいました。つまり、私の主観は議論の余地のないものになった。それは大きな革命だった。今日、女性たちが要求しているのは、まさにそれなのです。まるで自分たちにはまだ超越論的主観性が認められていないようだ、というのです。

保守的な人々との議論

リオジエ：二つ目は、保守派についての質問ですね。実はこの問いは、私がいまお話したことの延長線上にあります。伝統 (la tradition) はラテン語 *tradere*、「伝達」に由来し、「私は伝達する」という意味です。伝統の視点からすると、私の社会的地位、「男である」等の私の社会における立場は、アプリアリに、前もって定義されており、したがって私の主観は、私の権利の定義には何ら関係がないことになります。近代はこの論理を逆転させます。私が念頭に置いているのは、「近代性」と「新しいもの」を混同しているメディアが流す定義ではなく、本当の意味での「近代」の定義です。近代 (modernité) は、「実存の様式」、「生の様態や様式」、実存の多様な様態、つまり主観的な生の選択の多数性を意味します。青、緑、赤の服を着てもいいし、同性愛者であってもいいし、神であれ何であれ自分が好きな物を信じる選択をしてもいいし、それが私の主観だというわけです。近代は、史上初

めて実存様式の多数性を認め、その結果、人がモードやファッションと呼ぶものを社会が崇めたててるまでになりました。それは、人が好きなように振るまい、自分自身をアポステリオリに定義することができるということです。

しかし、人はそれを恐ろしいと思いがちです。18世紀から継続しているこの動きを恐れる人々がいるのです。地球全体を結ぶコミュニケーション網が発達してからはこの動きは地球規模の動きとなり、すべての社会に影響を与え、フランスやアメリカだけでなく日本にも及んでいます。しかしその反応（réaction）のほうはさまざまです。ところで、近代を恐れる保守的な人々とはどのような人々でしょうか？ 主観性が多様であることを受け入れられず、多様化を恐れる人々です。つまり、反動的な人々なのです。彼らは、その状況を受け入れられずに反動を示すわけです。そして、反動的であるとき、人はどこに避難するのでしょうか？ 何のなかに？ 伝統のなかに、です。なぜなら、伝統とは、まさしく、男と女の違い等々を存続させていかなければならないと述べるものだからです。しかし、それは宗教そのもののせいでもなければ、特定の宗教が特に男女の違いを強調するせいでもありません。どのような文化においても、あらゆる宗教は、原初、つまり新石器時代から存在していたことを述べているだけです。したがって、どのような宗教であれ、宗教に戻ることは近代を拒否する方法であり、とりわけ個人の主観性の表現を拒否することであり、最終的には女性の主観性を拒絶することなのです。

では、そのような人々、恐れている人々とどのようにして話し合えばよいのでしょうか？ ええ、むずかしいですね。反動的な態度を示す人は、自分が抑圧されていると感じて感情の次元で動く人ですから。感情の次元で動く人とは理性的な議論ができません。だから、感情に働きかける以外にないのですが、どのようにすればよいのか私にもわかりません。反動的な態度を示す人とどのように議論すればよいのか、私は知らないのです。フランスで、私は反動的な人々と議論するのにとても苦労しています。増田さんは、アイデンティティ、イスラーム、移民の問題に関する私の仕事を知っているので、その点をよくご存じでしょう。イスラーム化の神話もまた、差異の拒否であり、支配的な自分の地位を失うことへの不安ですが、その場合と同じように、問題は感情なのです。人々がそのような不安を持ってしまうので、とてもむずかしいのです。

#MeToo とジェンダー・フルイディティ

リオジエ：三つ目の質問も関連しています。あなたは次のようにたずねられました。「#MeToo 運動は LGBT の動きを看過しているのではないか？」。この問いは、最初の問いに帰着します。つまり、「レイプの対象は女性に決まっているように思われているが、男性がレイプされたとき、それはレイプなのか」等々……。もちろん、それはレイプです。#MeToo 運動の作用は、最も明確に支配されている女性の状況を通じて、他のすべての支配の形態へと及びます。女性に対する支配は、さまざまな社会の歴史において支配のなかの支配だからです。しかし実のところ、私が言いたかったのは、女性の闘争はわれわれ男性にとっても有益であり、われわれ現代人にとっても有益であるということです。なぜなら、女性、トランスジェンダー、同性愛者など、どのようなカテゴリーであれ、万人に超越的主観性を認めることができる最終的なレベルだからです。だからこそ、#MeToo 運動と同時に、ジェンダー・フルイディティの運動が起こっているのです。

「ジェンダー・フルイディティ」とは何を意味するのでしょうか？ 自分がどのような性を持って生まれたかにかかわらず、ア priori に押しつけられた決定がなくなり、男と見なされたいか女と見なされたいか自分が最終的に決めることができるということなのです。ア posteriori に決定するのは私なのです。それはまさしく近代というプロセスの結果です。私が「潜勢的な近代」から区別している「現勢的な近代」は、18 世紀ではまだ宣言されたただけでした。（哲学的な数々の大いなる宣言によって）宣言されただけのもを通じて、まだ潜勢的であったことを現勢的に実践するためには、それからさらに 2 世紀以上かかることになります。そして、最も逆説的なことは、近代的であると自称する人々が、時に、それらの大いなる宣言を楯にして、たとえば、彼らが人間主義者であるときは、「そうは言っても女性は女性とみなされ、男性とは区別されるべきだ。そうでなければおかしい」などと言うのです。実際のところ、彼らは男性による支配は自然であると言いたいのです。彼らもまた恐れているわけです。親が子どもに「私はリベラルだから、おまえはしたいことをしていいよ」と言う。しかし実際には、彼らは「おまえがしたいこと」が何であるかについてア priori な考えを持っています。そして、子どもが本当に自分のしたいことをしたとき、「いやいやだめだ！ そこまでやるとは思わなかった！」と反応するのです。しかし、半

分だけやってすますことはできません。それなのに、ここには「半分だけやってすましたい」という人々の反応があります。すなわち、(潜勢的には)自分たちは近代的であると主張すると同時に、現勢的な近代性を拒否するという態度です。

そして最後に、日本の社会のほうが他の社会よりも欺瞞に満ちていると信じてはならないという、ささやかな指摘をさせてください。私はそのような思いをあなたの発言から感じ取りました。日本社会が非常に厳しい社会であることは知っています。私の娘は日本に一年近く住んでいました。彼女は日本が大好きです。しかし、日本にすっかり魅惑されている彼女にとってさえ、これは厳しいと感じたことがいくつもあったと話してくれました。しかし、フランス社会もまた、一連の点で非常に偽善的です。それから、法律の話がされたので申し上げますと、民法、ナポレオン民法典、フランス民法では、1980年代になっても、結婚した夫婦間でレイプはありえないとされていたことはあまり知られていません。妻となったのだから性交渉について同意があることは自明だとみなされていたため、明らかな暴力が振るわれてもレイプは認知されませんでした。というわけで、フランス社会は、その数々の宣言やそこで述べられた潜勢的な近代性に対して、非常に多くの偽善を抱えているのです。もしかすると、現勢的な近代性を適用するのに日本よりもっと苦労しているかもしれませんし、ある部分で日本社会から教訓を得ることさえあると思います。

社会問題としてのフェミサイド

増田：リオジエさん、どうもありがとうございました。『男性性の探究』という本は、男性にも、というか「優先的に男性たちに対して」書かれた本であるということで、一瞬司会の役から離れて、私からも簡単なコメントをさせていただきます。

『男性性の探究』は、サイズはコンパクトですが、非常に重要な問いを提示していると思います。ご本の趣旨には全面的に賛成します。「みんなのための結婚」を推進する主要人物の一人であるイレーヌ・テリーは、男女の平等を非常に重視しています。彼女にとって、カップルを結びつけるのは「平等な対話」です。私の考えでは、この「平等な対話」は、カップル以外に

も、すべての男女関係に広げていくべきものです。これはLGBTのような、さまざまな性的指向、性自認を持った人々の関係にも当てはまるべきです。また、隠岐さんがおっしゃったように、男性、特に少年も男性 (mâle) の被害者でありうることを指摘しておく必要があるでしょう。しかし、ここではその領域に立ち入ることは諦めます。

相手の意志と同意は、「平等な対話」によって確認されます。この構造の対極にある状況を、私はル・モンド紙の記事のタイトル、「彼女は彼のものであり、彼の対象であった」¹⁶という言葉に見出すことができました。そこで言われていた「彼女」はフェミサイドの犠牲者であり、犠牲者である「彼女」がパートナー男性の暴力的な支配に完全に服従していたという意味で、同僚の一人が記者に述べた言葉が先のタイトルとなっています。研究者のなかには、「フェミサイド」という言葉によって、これまで単なる「事件」にすぎなかったものが、社会現象や社会問題として扱われるようになると考える人がいます。私もまた、女性であることが理由で、単に女性であるという事実ゆえに殺害されたことを意味する「フェミサイド」が、女性に対する特定の暴力が存在することを社会が理解するのに役立つと思います。それは「人種」——「人種」概念の正統性を疑問に付すために括弧でくくっておきますが——ゆえに殺害するという、人種的犯罪との類比を示すものです。

日本は殺人率が非常に低いのですが、その割には女性が被害者となる殺人率が高いことが知られています。この事実は、ジェンダー・ギャップ・レポートにおける日本の順位が156カ国中120位であることと無関係ではないでしょう。女性は職場（雇用や給与）で不利な立場にあり、政治に参加する機会でも冷遇されています。一部の高校や大学では、入学の際に多かれ少なかれ秘密の定員割り当てがあり、女性の入学を制限しています。そのためもあってか、フランスとは異なり、女性の大学入学率は男性に較べて低く抑えられています。「カワイイ」という言葉はフランスの漫画ファンにも知られているようですが、女性に否応なくカワイイという属性を付与しようとする文化は、必ずしも男女平等を目指す文化ではありません。これらすべてはシステムをなしているようです。フェミサイドの割合が比較的高いのは、この

¹⁶ Schittly, Richard, «“Elle était sa chose, son objet” : un féminicide aux assises de Lyon», in *Le Monde*, 2020.07.19.

ようなシステム構造と関係がないのでしょうか？

さて、最初の質問です。フェミサイドは、男性の支配欲の極端な結果です。しかしフェミサイドは、『男性性の探究』にはほとんど登場しないようです。それが悪であることがあまりにも自明であったために取り上げられなかったのでしょうか？

抑圧すべき欲望？

増田：私の二番目の質問は欲望に関するものです。リオジエさんは、男性は「女性を見て欲望するよう条件づけられている」と書かれています。抑えるべきなのは欲望そのものなのでしょうか？ それともその欲望を一方的に、かつ過度にあらわすことなのでしょうか？ というのも、『男性性の探究』はピューリタニズムを提唱する本ではありません。本のなかで、ピューリタンの誘導をしようとしているのでも、ピューリタンの仕方で男女を隔離しようとしているのでもない、何度も強調されています。

アメリカのテレビドラマ『マスターズ・オブ・セックス』¹⁷への言及があるのもその文脈においてです。若い研修医が、現代性科学の創始者のひとりであるヴァージニア・ジョンソンに一目惚れします。彼は、ヴァージニアとつきあい始め、定期的にセックスをする仲になります。しかし、ヴァージニアは研修医の求婚を断っただけでなく、カップルとしてパーティーに一緒に出ることも拒否します。では、なぜ彼女は彼と寝たのか？ そう問い詰める研修医に対して、ヴァージニアは「だって、私はそれが好きで、あなたもそれが好きだからよ。」そう述べることによって、研修医が勝手に抱いた、自分は彼女の「主人であり、所有者である」——これは、デカルトが自然について述べたことを少しずらした文言です——という男性中心主義的な幻想を打ち砕いてしまうのです。

明らかなピューリタニズムには反対ですが、常に欲望を昂進させるようなシステムにも私はもちろん反対です。たとえば、最近ノルウェーの女子ビーチハンドボールチームに適用されたルールは、不条理だと思います。彼女たちはビキニを着てプレーするというルールを遵守せず、短パンでプレーする

¹⁷ アメリカのテレビドラマ。2013年から2016年に放送された。フランスでも少し遅れて放送が始まった。

ことを選びました。そのため、ルールを守らなかったとして罰金を科せられたのです。この事例は、私たちが「女性を見て欲しがるように仕向けられている」ことの一つの証左でしょう。

というわけで、第二の問いとしてうかがいたいのは、非難されるべきは一方的な欲望、過度な欲望の表明なのか、それとも女性に対するすべての欲望を排除することが絶対に必要なのか、という点です。欲望の排除は、精神分析の教えを信じるならばかなり実現が難しいと思われれます。私は、歴史的な観点からもこの質問をしています。「女性を見て欲望するよう条件づけられている」男という存在を批判的に見直そうという発言は、1968年の5月革命に結びつけられた「妨げられずに享受しよう」¹⁸という、のちに性の解放のスローガンとして位置づけられた発言とは隔たっています。5月革命は多くの人にとっての解放の出来事であり、とりわけ進歩的だと自認する人々にとっては疑う余地のない価値をもった出来事でした。その人々は #MeToo の言説に、解放に反するようなメッセージを聞き取ったから反発したのではないのでしょうか？ 68年5月は、間違いなく性の解放の始まりでしたし、その後の流れで女性解放運動が生まれたのも事実です。しかし、性の解放であったとしても、それは女性の解放には程遠い、女性の犠牲の上に成り立っていたと言われています。

究極の受動化としてのフェミサイド

リオジエ：質問をありがとうございます。安心してください。私は男性が女性に対して、あるいは女性が男性に対して持ちうる欲望を問題にしているわけではありません。それでは、言ってみれば、人類の種の存続を問題にすることになってしまうからです。それは私の目的ではありません。

しかし、最初の質問であるフェミサイドの問題について、その問題は実際に根底的な問題かつ帰結なのですが、私の本にそれが不在なのは、まさにそ

¹⁸ 原語は、「Jouir sans entraves」。当初は労働者革命と官僚制への抵抗を呼びかける文言だったが、次第に1968年の「5月革命」で叫ばれた性の解放のスローガンとして位置づけられるようになった。快楽主義を呼びかけるスローガンが、女性や子どもに対する虐待を動機づけることになったと指摘されることもある。

れが帰結であり、原因ではないからです。『男性性の探究』という本は、男性主義の原因に関する考察であって、帰結に関する考察ではありません。とはいえ、あなたは正しいことをおっしゃっているので、フェミサイドについて話してみましょう。少し前に亡くなった、フランスの有名な人類学者にしてフェミニストであり、コレージュ・ド・フランスの教授でもあったフランソワーズ・エリチエは、哺乳類の種のなかで自分の種のメスを殺すようなシステムを有しているのは人類だけであると言いました——徹底的に (systématique) ではなく、あくまでもそのようなシステムを有している (systémique) ということです。エリチエは古生物学者であったので、言うことはしっかりした知識に基づいていました。人類は、殺してしまうほどの暴力をメスに対して振るう種なのです。それは明白な事実です。

以上のことを、『男性性の探究』で私が述べた、女性の受動性と男性の能動性という象徴的な対置に結びつけてみましょう。女性が望ましい存在であるためには——少なくとも伝統的な見方からすると——、受動的でなければなりません。女性的な資質はすべて受動的な資質です。日本に関しては、伝統的な衣服である袴を取り上げることができます——私がこの例を取り上げるのは私が合気道をしているからで、合気道では袴を穿きます。幅の広いズボンのようなこの衣服は、男らしさの表現です。なぜなら、それはみごとに動きの自由を表しており、ありとあらゆる方向に脚を広げることができるからです。侍の衣服である袴とは逆に、日本における女性の伝統的な衣服は、非常にきつく締め付ける衣服であり、女性が満足に歩行できないという印象、衣服に妨げられて歩くことができないという印象を与えます。つまり、美しいとされ、価値があるとされるのは、女性があまりしっかり歩けないということ、動きが制限されているということなのです。

身体の受動性の極限とは何でしょうか？ 死です。過度に活動的な女性は、罰せられ本来の場に連れもどされます。すなわち、話さない、控えめにふるまう、慎み深い服装をする、つねに引き下がり、引き下がり、そして引き下がること、です。しかし、彼女がそのメッセージを理解しないとき、唯一の解決法は、彼女を完全に受動的な身体、つまり、死体にしてしまうことになります。これこそがフェミサイドなのです！ 最初の質問に対する答えは、然り、フェミサイドは男性主義の症候であり、女性が活動したいと主張することに対する、男性による極限の反応にほかなりません。

ポルノグラフィ・パラダイム

リオジエ：第二点は、欲望の問題についてです。私が標的にしているのは欲望ではありません。欲望を標的にすることは、私にとって現実的ではありません。私は他の著作のなかで、「存在の欲望」と呼ぶものが人間にとって根源的なものであると述べてさえます。その半面、問題となるのは、男性の欲望の構造、そして幻想の内容です。欲望の過剰、つまり強度ではありません。問題なのは、性によって女性を所有するという男の幻想がどのように構築されるかという、そして何を対象にしているかという点です。ヴァージニア・ジョンソンの話に言及してくださったのでそれと結びつけるなら、彼女は積極的に欲望を持つ人であり、奪われることを待たない人であり、男性と寝たからといってその男性の所有物になることを拒否する人なのです。そのような彼女が非難されるのは、積極的に欲望するからです。彼女はもはや、男性によって所有されるためにある受動的な身体ではありません。

男性において、男性主義的なメンタリティにおいて——それこそが処女性の神聖さを説明するものですが——、性行為は享受の行為とみなされていますが、それは単にオーガズムという意味での享受、男性が感じる快感という意味での享受の行為にはとどまらず、権利証書作成 (acte notarié)——これをどのように日本語に訳せるかわかりませんが——のような行為 (acte)、法的な所有を記す証書＝行為 (acte) だとも言えるでしょう。すなわち、民法上の意味での所有権を示すという意味です。民法において、ある財を享受するということは、その財の所有証書を持っているということです。だからこそ、男にとって挿入という行為は、印を押すようなものなのです。「これは私のものだ。私はおまえに性的に挿入した。いまやおまえは私の所有物なのだ」と。ところが、ヴァージニア・ジョンソンが異議を唱えているのはまさにその点なのです。彼女は、「あんたは私を貫き、私はそれがいいと思い、あんたもそれがいいと思った。」——彼、「うん。確かにそう。私はとてもいいと思った。」——彼女、「でも、あんたは私を所有していない。別の機会に人前にあんたと一緒に行きたくない。これでいいの。ピリオド。」

というのも、#MeToo 運動で忘れられがちなのは、同意とは男性に対して「ノン」と言う権利を認めることばかりでなく、「ウイ」という権利を認めることでもあるということです。それは、メディアも忘れていた点です。メディアがこの点について述べるのを私は聞いたことがありませんし、他の

人が言っているのも見たことはありません。まあ、もしかすると言われているのかもしれないので、私だけが言っていると主張するつもりはありませんが……。いずれにしても、私が本のある箇所で言っていることで、あなたの質問に直接関係しているのは、女性は性的関係を望まないときに「ノン」と言う権利だけでなく、男たちと同じ条件で「ウイ」と言う権利を要求しているということです。つまり、自分が望むことに即座に「ウイ」と言う権利です。男と寝る権利、しかも貶められずに、評価を下げられずにそれができる権利、すなわち「尻軽女」、「ふしだら女」、「売春婦」呼ばわりされずにできる権利です。それは、性の不平等な象徴的エコノミーの問い直しにほかなりません。それは、男性と寝る女性は、自分の名誉を手放すことはなく、自分を墮落させることはないという考えです。男性主義的な世界において、男たちによって女性に拒否されているのは、「ノン」と言えることだけでなく、「ウイ」と言えることでもあるのです。なぜなら、男性は女性にすぐに「ウイ」と言ってほしくない、特に自分の妻が、彼と出会う以前に他の男性に「ウイ」と言っていたのを発見することを望まないのです。#MeTooは、女性がこうしたすべてから解放されるべきだと主張するのです。

最後の点について、考慮されるべきなのは欲望の強度ではなく、欲望の内容であるともう一度申し上げます。この幻想的な内容は、ワインスタインにも見られます。ワインスタインは、本当にこれらの女性と寝たいのでしょうか？ 彼の行動の構造を少し分析してみました。実際にワインスタインが何よりもしたいことは、女性たちに屈辱を味わわせて自分自身の力を享受することなのです。その女性たちは女優であり、一定のレベルで支配する力を有しているのですが、彼はそのような女性たちを招きます。彼女たちと寝るために、彼はわざわざ手練手管を弄することはしません。いちゃつき、ナンバ、恋愛奉仕、礼儀正しいギャランत्रीといった戦略を用いるまでに身を貶める必要はないとして、そうしたものは用いないのです。彼女たちが寝室に来るのは、あらかじめすべてを受け入れる用意ができており、何のために来たのかを理解しているからです。ワインスタインは、その事実をまず享受するのです。そして、彼はバスローブ姿で彼女たちを迎え入れ、マッサージをするよう言います。つまり、それぞれの段階で、彼は女性の身体をというよりも、服従した存在としての身体、つまり跪いた女性の身体を享受するわけです。

これこそが問題なのです。そして、これこそ私が「ポルノグラフィ・パラダイム」と呼ぶものです。ポルノグラフィにおける男性の享受は、相手の受動性の享受です。たとえば、パートナーの複数化においてそれが見られます。いささか陳腐なことを言って申し訳ありませんが、複数で女性に射精して受動性を強調し、受動性そのものを楽しんだり、複数で挿入したり等々するわけです。その一切は、幻想的な仕方です。受動性を創造する手法です。だからといって万人が自分の妻に対してポルノグラフィックな関係をもっているわけではありませんが、実際のところこれこそが原初的な構造なのです。パラダイムがポルノグラフィックなのです。

したがって、おっしゃっていることは正しいですね。確かに、問題は欲望の過剰ではなく、欲望の一方的な性格です。なぜなら、ポルノとは何かというと、一方的なものだからです。男性は、関係が一方的であることを欲しており、微妙なのは一方的であること自体を楽しんでいるということです。一方的であるという事実、これこそが享受をもたらすのです。#MeTooによって問題視されているのは、この構造にほかなりません。

最後に指摘してくださった1968年の5月革命、「妨げられずに享受しよう」等々のスローガンについて。思うに、私たちは主観性が展開されていった歴史の典型的な産物であり、女性にも主観性を認め、より大きな平等への願望、男女間のより完全な相互性への願望によって動かされています。とはいえ、確かに5月革命には欺瞞があります。なぜなら、女性は当時その自由の恩恵を受けるための物質的な手段を持っていなかったのです。性の解放は女性よりも男性の方が恩恵を受けることになるからです。別の言葉で言うなら、女性たちは、物質的に（経済的に）男性に依存していました。そのため、性的に自由であろうとすると、結婚することが難しくなり、したがって生活できなくなるリスクがありました。その半面、性的に自由な男性には同じ問題はなかったのです。#MeTooが起こっているのは、基本的には、女性が物質的にさらに独立したということ、したがって経済的な危機に陥ることなく性的に自由になることができるようになったからなのです。このような条件において、5月革命の時点ではスローガンでしかなかった、そして女性が経済的に男性に依存しているかぎり実現可能ではなかった真の性的相互性を、#MeTooはいま要求しているのです。

増田：どうもありがとうございました。

包摂的書記法

大嶋：先ほどとは別の問題について質問したいと思います。保守政治家が強く批判している「包摂的書記法」(écriture inclusive) という新しいフランス語の書き方が提唱されています。フランス語には男性名詞・女性名詞があって、複雑な文法上のルールがあるのですが、男性形が文法のなかでさえも支配的だと言われています。それを是正する新たなフランス語が登場して、それを行政文書や学校教育のなかで取り入れるよう求める声がフランスにはあるのですが、これらに対して保守的な政治家は強く反発をしています。

とりわけ、一部の職業名には男性名詞しかないということが多く、たとえば医師を意味する *médecin* には女性名詞がありません。また、「主人」などさまざまな意味を持つ男性名詞 *maître* には対応する女性名詞 *maîtresse* がありますが、この男性名詞と女性名詞で意味範囲が異なっています。男性名詞 *maître* は学校教諭を指す場合も、*maître de conférences* という成句で大学教員を指す場合も使用されます。一方で、女性名詞 *maîtresse* は学校教諭を意味する言葉として男性名詞同様に使用されますが、長い間女性の大学教員は *maîtresse de conférences* と呼ばれず、女性大学教員を指す際にも男性名詞が使用されてきました。最近はずいぶん変わってきて、やっと *maîtresse de conférences* も少しずつ使用されるようになってきました。さらに、女性名詞の *maîtresse* には「愛人」という意味もありますが、男性名詞にはそのような意味はありません。つまり、性役割が言葉の定義のなかに深く根付いている状況です¹⁹。

しかし、たとえば極右の政党でも、女性の党首が誕生したり、保守政党も新しい価値を取り入れたりしようとしているにもかかわらず、そういったフ

¹⁹ フランス語に内在するジェンダー差別に関する邦語文献として以下のものが挙げられる。大久保朝憲 (2005) 「フランス語の性差別的言語構造について」『關西大學文學論集』55 (3)、119-138 頁。プロッソー、シルヴィー (2018) 「〈特集〉セクシズムと言語。フランス語の例と現在の議論」『早稲田政治経済学雑誌』(393)、11-19 頁。

ランス語の改革については否定的です。この点について、どのようにリオジエさんはお考えなのかうかがいたいです。

無意識としての言語

リオジエ：大嶋さん、ご質問ありがとうございました。包摂的書記法の問題は興味深いものです。というのも、包摂的書記法にやや激しい反応を示す人々にとっては、その書記法は、包摂的ではなく排他的書記法であり、過激主義の、フェミニスト等々の書記法だからです。確かに包摂的書記法には行きすぎがあるかもしれません。しかし、包摂的書記法の目的は、フランス語をさらに開くための試行なのです。言語はすぐれて文化的な表現なのですが、文化というものは文字通り男性支配の刻印をもっています。ありとあらゆる文化は、何千年ものあいだ男性主義によって支配されているのです。

したがって、社会を進化させるということは、文法を構造的な意味で進化させるということです。「構造主義文法」と言うときの「構造」、すなわち言語の無意識そのものを進化させなければなりません。フランスの精神分析学者であるジャック・ラカンとは、とても興味深いことを言っています。ジャック・ラカン全般を私はよく理解できないのですが、私の話にとって興味深い次の発言は理解できました。「言語の無意識があるのではなく、無意識とは言語なのだ」。つまり、無意識は語られた言葉のなかに直接表現されているということです。だからこそ、彼は裂け目に強い関心を持っていました。言い間違いをするとき、実際に言われたことは、意識的に言いたかったこととは異なっています。ところが、私たちの言語であるフランス語は、男性主義的な言い間違いでできているのです。

フランス語では、たとえば、「エアホステス (une hôtesse de l'air)」とは言えても、「エアホスト (hôte de l'air)」とは言えません。なぜなら、航空パイロットは必ず男性であり、キャビンアテンダントは必ず女性だと考えられているからです。いまでは女性のパイロットも男性のキャビンアテンダントも存在するのに、パイロットに女性形はなく、女性のみを示す「エアホステス」がそのまま維持されています。大嶋さんがおっしゃったように、*maître* は男性形のみで「主人」という意味を持ち、女性形の *maîtresse* の最も顕在的な意味は、男性と一緒に寝る女性（愛人）であり、主人として指

揮を執る女性ではありません。ここからわかるように、言語は無意識を表出させるだけではなく、無意識そのものなのです。したがって、先ほど申し上げたように、包摂的書記法が本当に排除する書記法でないならば、つまり包摂するというみずからの主張に合致する仕方では本当に包摂的ならば、包摂的書記を支持するしかありません。包摂的言語のなかには、実際に包摂の作用を持たない、誤った包摂言語もあるかもしれません。もし、それが真に包括的な文章ならば、男たちも含めた万人を包摂しなければならず、無意識へと作用することを可能にしなければなりません。私は何回も「幻想」という語を口にしましたが、その幻想こそが問題だと考えています。言語は男性主義的な幻想を運ぶのです。

増田：ありがとうございます。隠岐さんからもコメントをお願いいたします。

英雄と超越論的主観性

隠岐：最初の質問の続きになりますが、リオジエさんはまさに『饗宴』に出てくるような古代ギリシアの男性は *aristoi* という通常よりも強い男、すなわち英雄（ラテン語では *vir*、フランス語では *héros*）であり、エリートであるとお答えくださいました。そこにあるのは単なる男同士の愛ではなく、英雄同士の愛である、と。それを伺って私は、英雄がいるということは奴隷も存在しているということだと思いました。

また、イマヌエル・カントの超越論的主観性についても話してくださいました。しかし、私はそれについてさらに質問があります。人は、英雄にならずして超越論的な主体になれるのでしょうか。別の言い方をすれば、奴隷の存在を前提とするような「英雄」と、近代における超越論的な主体の二者は、ちゃんと切断されているのかということです。

というのも、『饗宴』を読むと、そこにある愛に少し憧れのようなものを抱く自分がいるのです。私も英雄になりたい、と。そして、想像上の英雄である私と、カントの超越論的な主体とは近いような気がするのです。そうではないならば、その理由を教えてくださいませんか。

超越論的主観性としての普遍的市民権

リオジエ：プラトンは複雑です。それぞれの作品で言っていることは、必ずしも同じではありません。たとえば、『国家』での分類法は、『饗宴』や他のテキストで見られるものとは少し違います。あまり解釈の細部へと入りこむことは避けながら、お返事しようと思います。

英雄でなくても超越的な主体になれるのか、という点です。ある意味では、近代のプロジェクト、つまり近代の素晴らしい、驚異的なプロジェクトとは、誰もが、どのような生まれであれ、潜在的にヒーローでありうることだと言えるでしょう。それとは逆に、古代ギリシアでは英雄となる権利、さらに端的に市民であること、市民権は、貴族階級のみ認められていました。たとえプラトンがまったくそうは言わないにせよ、アテネの民主主義は現在の語義から考えると逆説的に、貴族主義のシステムでした。すなわち、英雄であることと市民権は、エリートのためだけのものでした。

では、革命の先頭に立っていた、まったく無教養だったわけではないフランスの革命家たちは、なぜ「市民」という表現を使ったのでしょうか？ その表現は、古代ギリシアでは貴族を指す言葉として使われていた、つまり奴隷でもなく、貧者でもなく、移民でもない人々を指す言葉として使われていたのに？ なぜ、なぜそんなことをしたのか？ これは本当に興味深い問題です。というのも、彼らは市民権に形容詞をおぎなって「普遍的市民権」としたのです。普遍的ではありえないギリシア的概念の市民権、彼らはそれに、形容矛盾となるような「普遍的」を付け加えるのです。そして、「普遍的市民権」とすることで、誰もが *aristoi* (市民) となれることを主張しようとするのです。「普遍的市民権」は、19世紀になって当初の理念から逸脱し、貧困層や労働者も「市民」であるとし、彼らを体制側に抱き込もうとするシステムの一部となりました。しかし、1789年の宣言とそれに続くさまざまな革命が実現しようとしていたのは、普遍的な市民権を宣言すること、すなわち英雄を普遍化することでした。これこそ、超越論的主観性の定義です。それは、誰もが英雄になれるということ、すなわちしかじかの有力者の息子でなくても、その意志をないがしろにしてはならない誰かになれるということにほかなりません。

私はプラトンが複雑だと言いましたが、それは『国家』において描かれて

いるのが近代的なシステムではないにせよ、すべての子どもたちが共に養育されるシステムを描いているからです。ということは、彼らは潜在的にすべて英雄になれるわけです。そこには、1789年に明確化され、述べられることを先取りしたような言説があるのです。隠岐さんがされた質問はまったく正しいでしょう。市民権とは何か？ それは万人に与えられた英雄性（héroïsme）です。ただし、それは女性にも与えられた英雄性です。だからこそ、それはさらに高いレベルで性化された問題なのです。

英雄、そしていかにして男性主義を変えるか？

増田：ありがとうございます。今のお話をうかがっていると、全員が英雄になろうとしているとのこと。語源的な意味論からは、全員が男性的になろうとしていることとなります。そこにカントの超越論的主観性が結びついてくるといわけです。より自律的であり、より自主的な決断をおこない、より活動力に富む主体となること。それは両性の平等を目指す一つの方法かもしれませんが、そこで相変わらず高く評価されているのは、伝統的に「男性的」とされる価値ではないでしょうか？ 超越論的主観性は、自然と切り離された存在として自分を捉え、より完全な自律性、より大きな活動力を獲得して「人新世」と呼ばれる時代、そして環境危機をもたらしたという解釈も可能です。本当に万人が英雄を、そして超越論的主観性を目指すべきなのか。隠岐さんとのやりとりをうかがっていて、私はそのようなことを考えてしまいました。

しかし、それは脇に置いておいて、参加者の方からせっかく質問をいただいているので、紹介したいと思います。この質問は男性からいただいたのか、女性からいただいたのかで解釈の仕方が異なるかもしれませんが、読んでみましょう。「どうすれば、男性の支配のまなざしを変えられるのか？ 意識しようとするだけでは実効性がないと思いますが、どうでしょうか？」という質問です。リオジエさん、男性支配のまなざしを変える具体的なプログラムを何かお持ちでしょうか？

英雄と男性主義

リオジエ：ご質問に答える前に、英雄の普遍化という問題について少し述べたいと思います。英雄性はハイパーモダンな若者の夢となっています。どんな漫画を見ても、それが確認できます。漫画には何かしらカント的なものがあります。私のなかにすでにあったものが爆発し、力となって私のうちから出てきてほしいという欲望です。しかし、英雄を普遍化しようとする願望は、男性主義の勝利ではないのか。というのも、語源的に見た場合、「英雄」とは男性的な価値観を自分に集約させる者（ラテン語の *vir* は男、美德、英雄のいずれも意味します）だからだという点について。そして、男性主義は環境に対して振るわれる暴力の原因の一つでもあるので、もしかすると英雄の普遍化という考えは捨てるべきかもしれない、という点についてですね。私はそうは思いません。なぜなら、男性は言語を支配したため、語そのものに男性的な（暴力的な）意味を押し付け、英雄の価値と男性性とのあいだに等価性を確立してきたと考えているからです。ところが、私は、男性性を超えて自分自身を再定義する、非男性的な英雄性がありうると信じています。

男性主義の価値転換

リオジエ：次に、事態を変えるための手段について述べてみましょう。これは、実践的な、とても重要な実用的な問題です。この質問に答えるために、私の話の冒頭に戻ってみます。過激な態度で何かを変えることはできません。それは不可能です。なぜなら、私たちがそのなかで生きている幻想は、支配の幻想も含めて、私たちのセクシュアリティを支配してきたものであり、何千年も前から私たちの行動様式を支配してきたものであり、一定の効率性を生み出してきたものであり、支配されている女性にとってもある種の安心感を生み出してきたものでもあるからです。奴隷もまた奴隷としての行動の余地を持っていて、その条件に慣れたり、それに執着したりさえします。そして、奴隷であることに安心感も覚え、時に一定の精神的かつ物理的安心感を得るのです。フランスでは、1945年に女性に選挙権を付与する提案がされたとき、それに反対したのは主に女性の団体でした。その女性たちは、自分たちの女性性を失うこと、家庭内の母親の役割を失うことを恐れていたのです。というわけで、「さあ、これでお終い！もうあのポルノ的な幻

想を持つまい」と言って人は変わることができないのです。なぜなら、人はそうした幻想をもっと持ってしまうかもしれないからです。ただし、より秘密に、より非公式なカタチで持つことになるでしょう。そもそも、それこそ私たちが#MeTooから学んだことでした。親密圏における暴力的な行動を告発されたのは、しばしば、両性の平等について公式には進歩的な姿勢を見せる男たちだったのです。

だからこそ私は、極端ではなく、ラディカルかつ平和的な方法を提案しています。ここで、この議論ですでに用いた「価値転換」という言葉を使うことにします。「価値転換」こそ、この本で私がやろうとしていることなのです。第一段階として、問題を意識化するためにそれをラディカルな仕方でも名指すこと。人を罵倒する必要はありませんし、「おまえはマッチョ（男性優位主義者）で、汚らしいオスだ」などと言う必要もありません。そんなことを言う必要はないのです。単に名指せばよいのです。それで十分であり、それで十分にラディカルなのです。しかし、第二段階として、幻想をいわばもてあそび、のっけからそれを排除しようとしなさいことです。視点を変えながら幻影をもてあそぶことです。

私は、たとえば、フランスで試みられたある施策に賛成でしたが、それはスキャンダルを引き起こしました。私がよく知っている女性の国民教育相がそれを提案し、私もそれには賛成でした。私はその施策が目指す方向性を支持したのですが、とんでもないスキャンダルになってしまいました。彼女は学校で、ひとつのゲームとして、少なくともフランスでは女の子の色であるピンクの衣服、それもワンピースを男の子が着て、女の子は青い服を着てズボン姿になってみるのはどうかと言いました。当時言われたように、男の子を女の子にし、女の子を男の子にするためではなく、あくまでもゲームとして、ちょっとしたゲームとして、視点を変えるためにおこなおうというのです。そして、当然のことながら、女性として見られることが何を意味するのかに気づくためです。そして女性側が、男性のように見るとはどのようなことを理解するためです。そうした実践的な実験をしようというわけです。

また、私が「ピンヒール・パラダイム」と呼ぶ別のタイプの実験もあります。私の本でもそれについて話しています。ハイヒールは、もともと男性用でした。ルイ14世の宮廷の頃ですから17世紀、あるいはそれよりも少し前から、男性はより高く、まさにより支配力に満ち、より高貴に見せるために

ヒールを履いていました。しかし、ヒールが女性の属性、女性らしさの資質になると、それはどんどん細く、極小になってピンヒールとなったのです。なぜか？ なぜなら、バランスを崩して、女性の歩行を頼りなくし、より女性的にすべきだったからです。女性の依存や受動性が強調されるようにです。その困難な歩行は、男性の幻想をかきたてたのです。

今日、何が起きているのか？ 国際的な弁護士、大学教授、ビジネスウーマンを目指す支配力のある女性たちが、すぐれて女性的な象徴であるタイトなスーツにピンヒールという衣装で身を固めています。彼女たちは、ピンヒールの価値や意味を変えようとしているのです。彼女たちは男性の幻想を排除するのではなく、それをもてあそび、それを権威の証に変えてしまうわけです。ピンヒールの元来の意味を覆し、力の証へと変え、意味の秩序に混乱をもたらします。価値のシステムを自分たちの都合よいように作用させることによって、それを混乱させるのです。男性の幻想を、合気道で技をかけるときのように、つまり相手の力に逆らうのではなくそれを利用していくのです。その力をごくわずかに変化させることによって。これは、物事を進めるための唯一の解決法に思われます。棘が刺さってしまったときと同じです。身体に矢が刺さると傷ができます。しかし、一挙にその矢を抜こうとすると、出血を起こして死んでしまいます。それと同じで、一挙に幻想を取り除くことはできません。なぜなら、女性もあるレベルで支配の幻影に執着しているからです。したがって、価値の転換によってしか、幻想から解放されることはできないのです。考えられるのは、相手の価値をもてあそび、それを少しずつ変えていくという解決法です。

結び

増田：ありがとうございます。実践的なヒントを最後にいただきました。相手の力、偏見の力を利用して価値の転換をはかるといえるのは確かに有効な手段ではないかと思います。ほかの手段もいろいろあるとは思いますが、それは私たち全員が想像し、かつ創造しなければならないのでしょう。

ラウンドテーブルはこれからまさに佳境に入ろうとしているところですが、残念ながら時間が迫ってきてしまいました。本当は質問がもっとたくさんあるのですが、質問をしてくださったのにここで取り上げられなかったみ

なさんには深くお詫びを申し上げます。

私に残された役目は閉会を宣言することです。本日のラウンドテーブルにご参加いただきましたラファエル・リオジエさん、大嶋えり子さん、隠岐さや香さん、本当にありがとうございました。同時通訳のお二人にも、対面の会場であったなら盛大な拍手をお願いしたいところです。また、東アジア藝文書院のスタッフをはじめとするみなさんのご協力を得てラウンドテーブルを実現することができました。本当にありがとうございます。そして最後になりますが、もちろん、お忙しいところ多数参加して下さったみなさまにも深くお礼を申し上げます。

参加者プロフィール

ラファエル・リオジエ (LIOGIER, Raphaël)

エクス=アン=プロヴァンス政治学院教授。研究分野は社会学および哲学。著書に *Le mythe de l'islamisation. Essai sur une obsession collective* (Seuil, 2012), *Ce populisme qui vient*, (Textuel, 2013), *La guerre des civilisations n'aura pas lieu. Coexistence et violence au XXI^e siècle* (CRNS Éditions, 2016), *Descente au cœur du mâle. De quoi #MeToo est-il le nom?* (Les liens qui libèrent, 2018) (『男性性の探究』伊達聖伸訳、講談社、2021年)、共著に *Sacrée médecine. Histoire et devenir d'un sanctuaire de la Raison* (Entrelacs, 2011) (『〈聖なる〉医療：フランスにおける病院のライシテ』伊達聖伸・田中浩喜訳、勁草書房、2021年)がある。

大嶋えり子 (OSHIMA, Eriko)

金城学院大学国際情報学部講師。研究分野はフランス政治、国際関係論。著書に『ピエ・ノワール列伝——人物で知るフランス領北アフリカ引揚者たちの歴史』(パブリブ、2018年)、『旧植民地を記憶する——フランス政府による〈アルジェリアの記憶〉の承認をめぐる政治』(吉田書店、2022年)、共編著に『遠隔でつくる人文社会学知——2020年度前期の授業実践報告』(雷音学術出版、2020年)、『オンライン授業の地平——2020年度の実践報告』(雷音学術出版、2021年)がある。

隠岐さや香 (OKI, Sayaka)

名古屋大学経済学研究科教授。研究分野は科学技術史、科学の社会史。著書に『科学アカデミーと「有用な科学」——フォントネルの夢からコンドルセのユートピアへ』(名古屋大学出版会、2011年)、『文系と理系はなぜ分かれたのか』(星海社新書、2018年)、共著に *Entre belles-lettres et disciplines. Les savoirs au XVIII^e siècle* (Publications du Centre international d'étude du XVIII^e siècle, 2011)、論文に「『おそ松さん』にみるクィア性：性愛と「自立した男性」からの逸脱」(『超域的日本文化研究』(10)、2015年)がある。

増田一夫 (MASUDA, Kazuo)

東京大学名誉教授。研究分野はフランス思想・哲学、フランス地域文化研究。共著に『共にあることの哲学』(書肆心水、2016年)、『共にあることの哲学と現実——家族・社会・文学・政治』(書肆心水、2017年)、『デリダと死刑を考える』(白水社、2018)、『ヨーロッパの世俗と宗教——近世から現代まで』(勁草書房、2020年)、共編訳に『宗教事象事典』(みすず書房、2019年)がある。

編集者

増田一夫（東京大学名誉教授）

EAA Booklet 28

EAA Forum 19

フランスから見た #MeToo 運動

——ラファエル・リオジエ『男性性の探究』をめぐる

著者 Raphaël Liogier、大嶋えり子、
隠岐さや香、増田一夫

発行日 2022年3月18日

発行者 東京大学 東アジア藝文書院

製作協力 一般財団法人東京大学出版会

デザイン 株式会社 designfolio／佐々木由美

印刷・製本 株式会社 真興社

© 2022 East Asian Academy for New Liberal Arts,
the University of Tokyo



EAA Booklet - 28

EAA Forum 19

フランスから見た#MeToo運動

——ラファエル・リोजエ『男性性の探究』をめぐって

